

さんけん新聞

発行
NPO法人
三段峡-太田川
流域研究会
(代表・本宮炎)

〒731-3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木1734
090-34213046

一口メモ

▼牙をむく狼
冬の三段峡は、ひと度雪が積もると人を寄せつけない。急斜面の雪が崩れて

探勝路を塞ぐ。
正面入り口の狼石には何本ものツララが垂れて、牙をむく狼のようだ。

岩の苔は緑色のまま、氷の中に閉じ込められている。凍てつき、眠ったような渓谷で、命は春を待つ。

「エコツーリズム・インタープリテーション人材育成支援事業」研修

自然資源生かす人材育成学ぶ

12月15日から3日間、栃木県で開かれた環境省の人材育成支援事業の集合研修へ、さんけんと安芸太田町がチームを組んで参加した。22時間の講義を受け、行動計画などを策定した。



全国から集めた研修参加者

「エコツーリズム・インタープリテーション人材育成支援事業」研修へは、全国的な活用計画の策定手法など学んだ。本宮事務局長は「NPOと行政の担当者が一緒に学び、議論できて、不安要素を解消できた」と、今後の協働事業へ自信を深めた。正木主査は「現在の課題が明確になったのが収穫だった。今回学んだ内容を地域へ還元させた」と、成果を強調した。

事業実施団体の日本環境教育フォーラムから一月三十一日、アドバイザー派遣地域に選定されなかった、と連絡があった。広島地域には、広島修道大学の西村仁志教授ら経験豊かな人材が多く、その人たちと連携するのが効果的と判断したのが理由。

安芸太田町餅ノ木出身で、広島市安佐北区在住の舛見奇麗(きれい)さんを一月二十四日と三十一日の二回、さんけんの本宮炎理事長と本



話を聞いた舛見奇麗さん(左)。元気で理容院を営んでいる

全国自然体験活動指導者集会が一月二十、二十一日の両日、江田島市で開かれ、さんけんの小林久哉理事が参加した。「里地・里山保全分科会」では、理事でもある芸北高原の自然館の白川勝信氏が、芸北地域の「せどやま事業」を紹介した。

集会では、全国の自然体験活動の変遷や事例が紹介され、里地・里山保全のほか、エコツアー・インバウンド、森のようちえん、災害教育、アクティブラーニングの各分科会で議論を進めた。

南峰と歩く⑥

餅ノ木(もちのき)

峡谷研究の拠点 舛見父子が支援

三段峡開発の初期、熊南峰と斎藤露翠が編んだストーリーには、地元民の尽力があった。露翠には横川の住民が協力し、南峰には餅ノ木の舛見戸市・府市父子の存在が大きい。

成功した。道なき道を案内し、筏を急造して撮影地点まで渡したのが、二十歳過ぎの府市だった。岩頭に立つ姿を写真に留めている。

以後、南峰は舛見家を三段峡研究の拠点の一つとして、戸市・府市も道の整備などに多大な労力を投じた。

餅ノ木は八幡川河畔の集落。江戸期のたたら跡が知られる。舛見家は「三段峡保勝会」の古い看板を掲げる。戦前の「榎屋旅館」から「民宿ますや」へと名を変えながら、足を休める探勝者を迎えた。今、住む人はいない。

当時の宿帳や南峰の手紙などを府市の六男、奇麗(きれい)氏が受け継ぐ。三段峡のキャッチフレーズは「天下の奇勝」。舛見家の三段峡への思いが偲ばれる、子への命名である。(松尾俊孝)

田舎と都市との「ハブ」

波田和弘さん



2001年、筒賀の「ありんこ農園」を借り、広島市から通いながら、地元のじいちゃん達と野菜づくりに励む。陶芸にもチャレンジし、行きつけのお好み焼き店へ顔を見せる。率直で、遠慮のないしゃべり口だが、壁を作らない人柄は、誰でも友達になってしまう。安芸太田で人生を楽しむ名人だ。

高校生のとき、部活動で三段峡の山を2泊3日で踏破したのが、忘れられない思い出。広島から多くの友達を連れて来て、出会いをつくる。都市と田舎をつなぐハブの役目を果たし、さんけんの監事として組織を支える。(炎)

広島県立文書館 平成29年度第3回収蔵文書の紹介展

開峡百周年 三段峡の歴史と自然

江戸期の「松落葉集」や「芸藩通志」、熊南峰撮影の「安芸三段峡三十三景」、絵葉書、斎藤露翠の教員名簿、名勝指定と西中国山地国定公園指定の関連文書、観光パンフレットなどを展示している。

■3月17日(土)まで(日、祝、土曜午後は休館)。無料
■県立文書館(県情報プラザ内) 広島市中区千田町3-7-47